J. J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その 2）
―京都から美濃境まで―

山田直利 [1)]・矢島道子 [2)]

【訳者まえがき】

本邦訳は J. J. Rein（1880）の「中山道旅行記」（独文）を全訳し，それを（その 1）～（その 7）の 7 篇に分けて掲載するものである．原論文は「章・節」のほかには見出し語がなく，段落間の文章も長いので，邦訳では新たに見出し語を設け，またなるべく短く段落を入れた．原論文の脚注は，邦訳では原注として各章・節の末尾にまとめて配置した．訳者による注は訳文中の括弧〔　〕内に記入したほか，別に訳注を設けて原注の次に配置した．さらに原論文・原注・訳注に引用された文献のリストを章・節ごとに載せた．なお，原論文には多数の植物の学名が載っているが，邦訳ではすべて原文のまま使用した．また、長いダッシュは原文のままとし，短いダッシュは訳者が付けた．

2．J. J. ライン著「中山道旅行記ー著者自身の観察と研究に基づき，E. クニッピング氏の路線測量に従い，その覚書を利用したー」全訳（つづき）

2. 2　京都から美濃境まで（原論文の I 章；第 4 図）

＜京都＞

街道〔中山道〕は京都の東方でまもなく山城と近江の国境（くにざかい）を越え，それからは近江の国の真ん中を通る．街道は大津の南で琵琶湖の南端に触れ，それからは琵琶湖南東岸から少し離れたところを通り，最後は琵琶湖の北東で東方に向きを変えて美濃へ向かって国境山地を越える．

草津までの最初の区間では中山道と東海道は共通である．両道の終点は共に北緯 35°にある．ここはいわば古代に栄えた土地である．我々が通過するすべてのところ，我々が越える丘陵や橋，我々が遠くあるいは近くの至る所で見ることができる山々や寺院：これらはすべてこの国の古い伝説や中世の豊かな歴史の中で際立った役割を演じている．そのため教養ある若い日本人は，おそらく我々ドイツ人が海やアルプス山脈を恋しがるのと同じように，昔の英雄たちの住んだところや彼らの偉業の舞台を見ることに憧れる．なかでも京都を見ることは彼らの烈しい欲求である．

この古いあこがれの街には，千年以上の豊かな歴史への尽きない多くの思い出があり，数知れない有名な寺や観光地，清潔な街路及び魅力的な環境がある．この街を東方，北方及び西方で，近くあるいはずっと遠くで取り囲んでいる山脈と丘陵は，灌木と森で蔽われている．それらの麓あるいは山頂近くの至る所で，宝塔や寺の屋根が木々の緑の中から突き出ている．この街の住民には夏に待ち焦がれた夕涼みがあり，そして，これ以上考えられないほど美しい眺望の楽しみがある．この最たるものが，鴨川から街が徐々に高まって行く東山，すなわち東の山稜であって，そこでは数百の茶屋やその他の娯楽場が享楽を求める住民を待ち受けている．

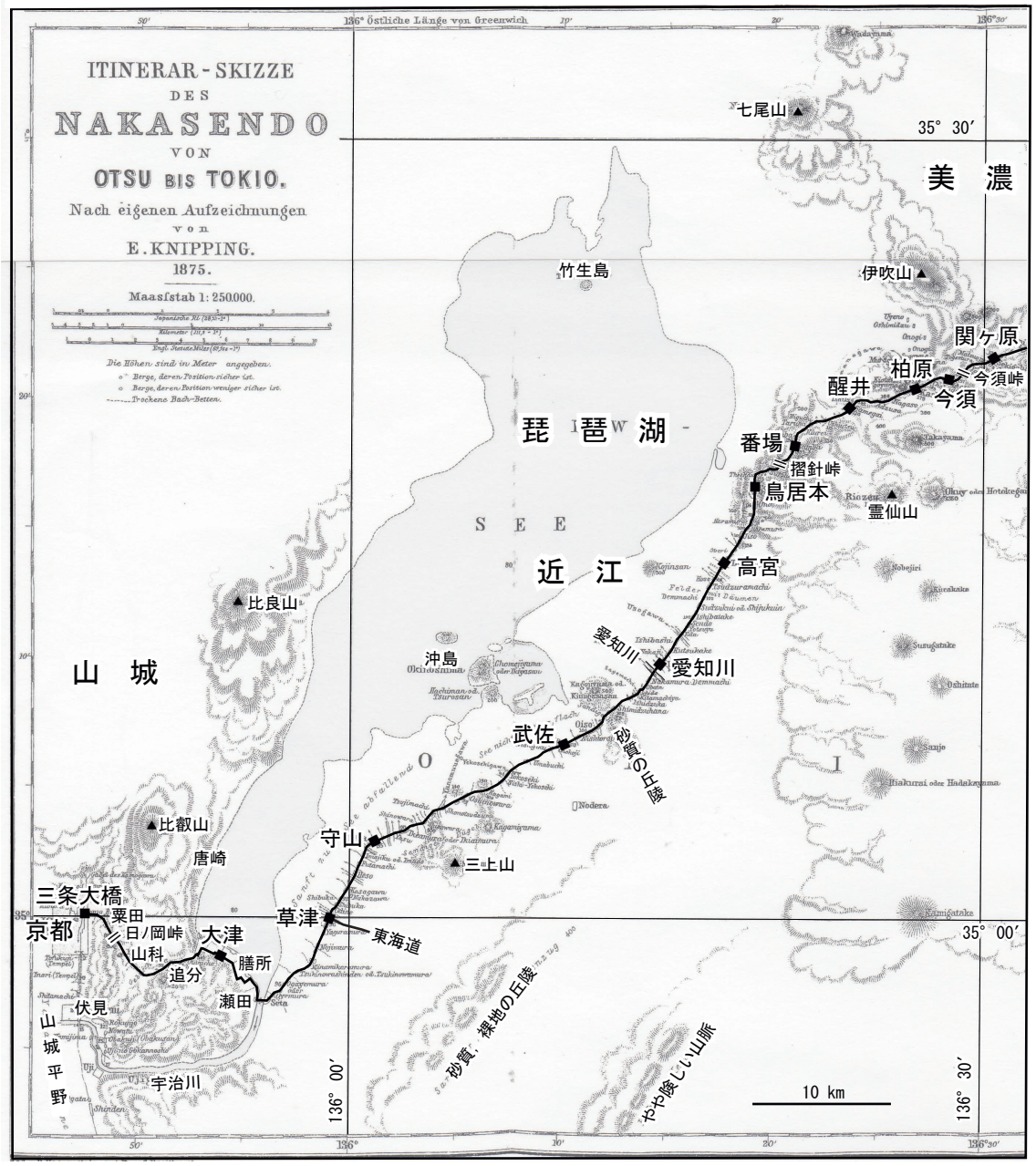
＜三条大橋＞

帝（みかど）と将軍の古い居住地，重要な工業地（窯業を除く），商店及び大交通路としての寺町（寺町通り）をもつ京都の主要部は，すでに述べたように，鴨川の右岸に広がっている．それと街の東側を結ぶ橋のうちで，寺町へ通ずる三条橋〔三条大橋〕は最も古く，最も有名であるだけではなく，きわだって美しい．この立派な木橋は秀吉（太閤様）によって築造されたらしく，それからやがて 300 年が経とうとしている．三条橋，すなわち文字通り三条通りの橋は，それを Sansjô-no-fas〔fasi の間違い〕と名付けたケンペル〔ドイツの医師・博物学者；山田・矢島，2017 の訳注 *2 参照〕によれば，長さは 200 エルレ〔1 エルレは約 67 cm〕もある．けれども鴨川は，豪雨の後にのみ河床全体に水を湛え，それ以外のときは京都の西側の桂川すなわち大川（大きな川）よりも浅く，ずっと水量が少ない．人々は乾いたところにある花崗岩及びチャートの礫の上に白木綿の長い布を晒し，それに水を注ぐために慣れない如雨露（じょうろ）の代わりにシャベルを使う．鴨川の澄んだ軟らかい水はとくに晒しや染色の目的に対して評判がよい．

夏の夜には三条橋から鴨川の上や畔に面白く陽気な活動が見られる．それはここで夜ごと開かれるイタリア式夜祭で，ここで享受される涼しく新鮮な空気がなによりもこの

1）地質調査所（現産総研 地質調査総合センター）元所員
2）日本大学文理学部

キーワード：ライン，中村新太郎，中山道，地形，地質，動植物，歴史，伝説，近江，比叡山，琵琶湖，伊吹山



第４図　中山道路線図１.（京都―関ヶ原）
Rein（1880）の付図Ⅰ「25 万分の１中山道旅行路線図―大津から加納まで―」（東縁部を除く）を基図として，それを約２分の１に縮小し，その上に中山道六十九次の宿駅（黒四角）名をやや大きな字で，本論文で引用されているその他の地名・説明をやや小さな字で和名表記した．

祭りに人々を誘う．人々はこの目的のために水上に手軽な杭上家屋〔川床（かわゆか）〕を作る．それは開放的な板の間で，そこへは多くの隣接する茶屋から小さな渡り板が架けられる．さまざまな形や大きさの数百の色とりどりの提灯が，この臨時の建物，周りの無数の小舟及び家々の露台や縁側を照らし，美しく飾る．ここには住民のあらゆる階層から多数の仲間が集まり，茶，酒，歌及び三味線を前にして愉快で嬉々としている．

東京にも隅田川で似たような夏の夜祭があるが，それは京都の祭を真似したものであり，毎年の川開きにはいつも大変な人出がある．

＜比叡山＞

三条橋からは街の北東に高さ 825 m〔正確には 848 m〕の比叡山を望むことができる．この山は，鴨川と琵琶湖の間の分水界，山城と近江の国境の中で２番目の高さである．しかし，これをこの国の最も有名な山の１つにしたのは，その高さではなく，多くの歴史的連想である．なぜ

なら，比叡山は数世紀の間仏教の本山であり，国内のほかのどこにもないような権勢と栄光を保持してきたからである．

今日の京都に帝の城，平安城（平和の城）を建てた第 50 代桓武天皇は，この僧院の初代創立者でもあった．この僧院は時の経つうちに約 500 の寺と 3,000 人以上が住む僧舎にまで膨張し，国家における巨大な勢力を持つに至った．管主は帝の血統の王子であった．寺は鬼門（鬼の門），すなわち正確に城の北東，または仏教的迷信によればすべての禍が来るとされる方向にあり，その禍は長い単調な祈祷，大太鼓の絶え間ない打音や鐘の音によって，平安城から遠ざけられねばならなかった [1]．

昔の栄光のかすかな痕跡，すなわち幸福ではなかったとしても興味ある時代の最後の証人が残っている．それを見るために，我々は 1874 年に京都から比叡山へ登った．山頂には 2，3 時間あれば到達することができる．道は豊かな谷底平地から白川村〔現左京区北白川地区〕を通って上へ緩やかに通じている．白川村の近くでは美しい灰白色の花崗岩 [*1] が採掘されており，それは山稜全体の基盤を作っているが，時代不明の粘板岩 [*2] が至る所でその上に重なっている．比叡山の険しい絶頂は玄武岩質である [*3]．絶頂の下，広い鞍部で我々は，美しいスギ林の北東部になお 3 つの寺院とこれに接した様々な僧房に遭遇した．かつては活気ある聖地であったところはすべて荒廃し，寺院は閉ざされている．その建物からは黴の匂いが浸み出し，前庭の厚いコケの褥（しとね）の上によくあるヒカゲノカズラ（*Lycopodium clavatum*）の枝が絡み合っている．

かくしてこの世の栄光は移り行く！（Sic transit gloria mundi！）

＜信長＞

このような栄枯盛衰をもたらした原因を訊ねるならば，何よりも，ケンペルが「暴君」と呼んだ信長の名が挙げられる〔ケンペル・斎藤, 1977〕．――信長とは何者か？――．その頃日本に上陸し，キリスト教を普及してめざましい成功を収めたポルトガル人司祭，メンデス・ピント [*4] によれば，信長は 16 世紀の中ごろの日本で最も傑出した人物であった．彼は，1542 年～ 1582 年の期間に，内戦の只中にあって帝国の権力を掌握するための戦士として先頭に立ち，足利将軍を滅ぼし，仏僧の敵となってその力を打破したが，キリスト教―その精神は彼には縁遠い―の庇護者ではあってもその友ではなかった．イエズス会神父クラッセが「日本教会史」の中で彼に贈った賛辞は，前に引用したケンペルの意見とは調和せず，彼の伝記からの多くの事実とも調和しない [*5]．

織田信長 [2] は平氏の一族であったが，このような家門血統は彼の権勢への栄達とはなんら関係はなく，その栄達はむしろもっぱら傑出した軍事的能力と限りなき野心の結果なのであった．このような資質を持っていたにもかかわらず，彼は平和を渇望するこの国に必要な安寧をもたらすことには成功しなかった．最も身近な親族の命を野心と猜疑心で蔑（ないがし）ろにし，帝にのみふさわしく死者にのみ許される人間神格化の権利を自らのために要求し，自身の彫像を神の肖像に置き換え，そして神に対するのと同じくこれにも敬意を表させた男は，他のすべての高い天分はあっても，キリスト教の精通者でも友人でもなかった．仏僧に対する憎しみから，そして危険でない安価な同盟者を得るために，彼は新しい教え〔キリスト教〕の普及を援けた． なかでも比叡山の僧侶たちは，彼の敵対者〔越前の朝倉家，北近江の浅井家など〕に度々庇護と支援を申し出ていたので，そのことについて彼の怒りを受けることになった．

信長が 1571 年にこの僧院を火と剣をもって根こそぎ破壊するよう武将に命じたところは，比叡山とその僧院を見ることができる中山道の瀬田の琵琶湖流出口の近くであった．その古さと名声へのいかなる考慮も，命令を取り消すようにとのあらゆる懇願も空しかった．信長は大声で答えた：「この僧侶たちは私の命令に服せず，常に悪党を助け，そして帝の兵にも反抗した．私がいま彼らを排除しなければ，この憂患はいつまでも続くであろう．さらに，私はこの僧侶たちが戒律を犯していると聞いている；彼らは魚と臭い野菜を食し [3]，妾を持ち，そして読経をせずに経典を巻いてしまっている．どうして彼らが悪に対する番人，そして正義の守護者でありえようか？」――次の日に彼の命令は実行され，いかなる命も救われることなく，それどころか業火を免れた者も剣によって滅ぼされた．

＜粟田＞

三条橋から道は芝居街を通るが，そこでは芝居小屋の切妻が，なにか動物園の見世物のように，さまざまな出し物の場面の絵で色とりどりに飾られている．そののち，我々は京都の東のはずれ，粟田に到着する．粟田の街は大津に向かって長く延びている．そこは工業地区であって，なかでも粟田焼と呼ばれる美しい磁器が作られており，それは薩摩焼に似ているが，あまり丈夫でないことと黄ばんだ色調により薩摩焼とは容易に区別できる．ここから街道は郊外へと進み，緩やかに高まる 2 つの低い鞍部，日ノ岡峠と大津峠 [*6] を越え，そこから急に下って琵琶湖畔の大津の街に着く．三条橋からの全行程は 3 里になる．この間

は，わずかな例外を除いて，両首都間の最悪の道路区間である．その理由は，ここで大津と西の首都（京都）の間の非常に盛んな物資輸送を支え，中央及び北方の国々の米と他の糧食，茶，生糸及びその他の生産物を京都に供給している多くの牛車が通るためである．

大きな車輪をもつ大八車は特に鈍重で不恰好な車であり，それは道路に，そして大きな鋪石にさえ深い轍（わだち）を刻み込んだ．ずっと前にはそれを改善する試みもあった[4]．そして，すべての車両はわずかな鉄も，また外車輪も持たず，これらはむしろ木から作られているにもかかわらず，轍はできるのである．我々は，木の硬さや強靭さよりも，鉄釘やねじがなくともこのような車両に必要な堅牢さを持たせることができた車大工の器用さの方に，もっと驚かされる．牽引する牛の力の多くは，堅い車軸上の車輪の摩擦によって失われてしまう．我々はまた，荷馬車と同じように，強力な黒色または暗褐色の牛の引く車も不都合であることを知る．なぜなら，この国では家畜の去勢は行われていないので，このような牽引は元々から持っている力であるから．軛（くびき）は額（ひたい）にしっかりと付けられず，動物の頚（くび）に動きやすいように付いている；力を出すところは普通頭ではなく，胸に集中する．この鈍重な車引きの獣たちは，各々の鼻に輪を付け，そこに牽綱（ひきずな）を通す．脚は馬と同じように藁沓（わらぐつ）によって守られ，予備として常に数組の藁沓が携帯されている．

＜追分＞

粟田焼の原料の１つ，日ノ岡土[*7]が近くにある最初の高まり，日ノ岡峠[5]を越えると，道は平らな谷底盆地へと下り，その中の村，山科及び追分を通って行く．ケンペルは山科付近ではたばこ栽培と竹について，追分付近では盛んな種々の工業について述べている．実際に追分は今日でもなお非常に活気ある所で，その家並は街道に沿って長く延び，錠前師，ろくろ師，彫刻師，分銅製作人，針金師，画商及び仏具商が，もはや盛んとはいえないけれども，200 年前と同じような仕事に付いている．

これよりももっと別なことが我々を驚かせる．すなわち，旅人は長い街並を通り過ぎる間に，右や左の茶屋の開かれた座敷からの大勢の茶屋女の騒々しい声で，座敷に入って一休みして行かないかと呼び掛けられ，そしてこのことは旅人が通るたびに繰り返されるので，女たちは一日でかすれ声になってしまう．それらは評判の悪い店や女たちと言われていたので，我々は以前からこれらの茶屋と給仕女たちについて間違った心象を伝えられていた．これらの店は決してそのようなものではなく，おおむね実にまともな飲食店なのである．そこで人々は休息し，わずかな食事を楽しみ，あるいはきちんと食事を取る．給仕女たちは綺麗に着飾り，非常に親切で，気分は陽気であるが，態度は礼儀正しい．「お休みなさい」（私はよくお休みになれるよう祈ります，だから “gute Nacht” とも同然）またはなにか別の言葉での呼び掛けは，大昔からの，罪のない，ときには我々にとって非常に煩わしい習慣ではあるけれども，それは明らかに主要交通路における激しい競争に起因する．なぜなら，このような習慣はこの国の辺鄙な脇道では見かけないが，多くの人が訪れる霊場や見晴らしのよい箇所の近くではよく見られるからである．

我々は席に座るようにとの勧めに従い，縁側で短い休息を取るか，あるいは藁布団の置かれた腰掛に腰を下ろすと，人々は急いで我々の前に火鉢（炭の鉢）を持って来るので，我々はその真っ赤におこった炭で短い煙管（きせる）に火を付けることができる．そして小盆の上に小茶碗のお茶を，それに加えてさらに渇きが激しいときには注ぎ足せるように小さな土瓶（茶瓶）を持って来る．それから人々は，我々が勘定をし，出発し，多くの人達から「さよなら」（Adieu）といわれて遠ざかるまで，天気や，我々の旅がどこから来てどこを目指すのかの問いや，他の事柄について，誰もが知っているような話をして，我々を楽しませようと努める．

追分とは街道の分岐点のことであり，中山道ではしばしば繰り返し現れる地名である．ここにいう追分で主街道から分かれた１本の道〔伏見街道〕が，〔山科川の〕谷に沿って南西の伏見に向かい，さらに淀や大坂へと向かう．

追分から街道は大津峠に向かってふたたびいくらか高く登り，峠ではすぐに琵琶湖とその周辺の眺望を楽しむことができる．追分に着く前にすでに左側にそして道から北方のずっと遠くに，比叡山が見え，しかし右側にはクニッピングが小山（小さな山）と記した男山[*8]（すなわち男らしい，堂々たる山）が現われた．この山には大きく有名な神社があるはずだ．

＜大津＞

大津．ケンペルは述べている．「都からの街道沿いにあり，近江の国第一の都市である大津[6]（Ootz あるいは Oitz）には，肘のよう曲がっている一筋の中央の道路といくつかの横町があって，合せて約千軒の小さい農家と庶民の家からなる．けれどもそこには立派な旅館もあり，浮気相手の女たちに事欠くことはない．」〔ケンペル・斎藤，1977〕．我々はこの記事から，約 200 年前の大津は今日よりもずっと目立たないところであったと結論する．な

ぜなら，我々は日本で一般にそうであるように，各家に 4 人半から 5 人の住民が数えられるので，街には当時，今日の 4 倍の数，精々 5 千人の住民しかいなかったからである．肘のような形の主街道はいまでも残っている．主街道は琵琶湖の湖岸に平行に北西方向に長く延び，〔札の辻で〕南西に向きを変え，最後は山の方へ，大津峠そして京都に向かう．主要な横道は主街道から湖の方へ延びている．旅館の「女たち」に関しては，ケンペルが彼の本の他の多くの箇所と同様に間違っていたか，あるいはそれ以後風習が著しく改善されたかの，どちらかであろう．大津は，ケンペルも述べているように，帝王（Kaizer），すなわち江戸に居住する将軍の直轄地である．なぜなら，帝（Mikado）はケンペル，ツュンベリー〔スェーデンの植物学者；山田・矢島，2017 の訳注 *3 参照〕，イエズス会員〔ピント〕及びその他の著者たちによってずっと古い時代からつねに「内裏（だいり）」，すなわち文字通り「皇帝の宮殿」と称されているからである．

今日の大津は，それが属する郡，滋賀郡（ごり）の名を取って滋賀という名前も持っている．それは滋賀県と呼ばれる部局または県の首都であり，その恵まれた位置によって非常に活発な商取引が行われている．東山道及び北陸道〔原文では Hokurokudo〕の近隣諸県の米，茶，絹，紙，陶磁器及びその他の生産物は，大津を経由して京都あるいは伏見及び大阪に届けられる．逆に，兵庫からの輸入品の一部は滋賀を経由して内陸への道を取る．これまで京都との貨物流通を担ってきた荷車や牛車についてはすでに考察した．この国のどこにも，ここでのように上記の目的に役立つよう育てられた多くの，そして立派で力強い牝牛は見られないのである．

若狭，越前，加賀などの日本海沿岸諸国との流通の重要な運送手段として，琵琶湖上に舟運が行われており，それは今日でもなお小さな蒸気船を用いている．しかし，それと並んで，間もなく出来上がる京都・大津間の鉄道 *9 を琵琶湖の湖岸に沿ってその北端の田野浦〔塩津浜〕まで，そしてそれからさらに重要な港，敦賀にまで延長することも，すでに注目の的となっている．

工業の関係では，大津は，そこで製作されている多くの算盤または計算器によってのみ注目されている．

＜琵琶湖＞

日本人は街の記述を，寺社，山々，河湖，聳え立つ樹木などのような，一見の価値あるところとその周辺を数え挙げることから始める；我々はそれを以て終わりとすることにしたい．大津の最高の見所は，議論の余地なく，美しく大きな琵琶湖及びその周囲の場所，寺社及び山々の光景である．日本人は琵琶湖の形を琵琶と比較して，そこから名付けており，この比較はヒューブナー男爵 *10 の「不規則な四角形」との比較よりずっとよく当てはまっている．

この湖は，近江の国の中央に，そして大阪湾，若狭湾及び尾張湾〔伊勢湾〕の中間に，南南西から北北東に向かって約 8 マイル〔1 ドイツ・マイル＝ 7, 420 m〕延びており，北部で 2 マイルの最大幅を持つ．その面積はほぼジュネーブ湖〔レマン湖〕の面積と同じである．美しい緑色の湖水面は標高約 100 m〔正確には 85 m〕の高さである [7]；最大の深度は 85 m になるようであるが，その深度に達するところは極めて限られている．多くの村とよく耕作された田畑が湖を取り巻いている．田畑は南部を除いたすべての側で，徐々に鬱蒼たる山々へと高まって行く．2 つの小さな岩の島〔沖島（おきのしま）と竹生島（ちくぶしま）〕が湖面から頭を出し，そこには夥しいウ〔鵜〕，カモメ及びその他の水鳥が棲んで，魚を取るのに余念がない [8]．水がどこでも透明で周囲が風光明媚であるにもかかわらず，琵琶湖は，景観の壮大さにおいてアルプスの湖沼に比べられるものではない．しかし，ここは歴史が豊かで伝説に富む地であるから，日本人にとっては一般に歴史的興味が美しい自然と結びついているので，日本人はこの湖盆を国の一大名所に数えようとしている．

＜三井寺＞

我々が小蒸気船の着く大津の波止場に美しく佇む宿屋の縁側に立つならば，近江八景または琵琶湖の 8 つの有名な光景のさまざまを観ることができ，また遠く響きわたる三井寺（みいでら）〔正式には長等山園城寺（ながらさんおんじょうじ）〕の夕べの鐘の音（三井の晩鐘（ばんしょう））―その音に日本人は陶酔する―を聴くこともできる．同時に，魅力的なところにある有名な寺院，三井寺そのものの露壇が遥かに美しい眺めを提供する．それは，街の北西，鴨川と琵琶湖の間の山脈―すでに話題になり，さらに北方の比叡山と比良山（ひらさん）〔原文では Hirayama；標高 1,174 m〕において最高峰を示している―の東山腹上の高まりにある．三井寺は中国に起こった天台宗に属している．それは中世には権勢と声望において比叡山の寺院に劣ることはほとんどなかった．そして，時の支配者はその豊かな収入を大きく奪い，僧侶の数を噂では 300 人に減らしたけれども，今日でもなお瞑想的仏教の優れた道場である．――高い石段を上れば寺の境内に達する．それはすばらしい庭園の真ん中に壮麗な姿を示している．しかし，見るべきものは庭園の中でここから遠くない大きな鐘であり，それには次のような物語が結び付いている：

危険なムカデを殺した勇士，俵（たわらの）　藤太（とうた）[*11] は，琵琶湖底の地下宮殿である竜宮の乙姫からお礼としてこの立派な鐘を貰い，それを寺に贈った．しかし，弁慶，日本の巨人ゴリアテ [*12] はそれを盗み，肩に担いで比叡山の僧侶のところへ持って行った．しかし，彼が鐘を吊り下げ，人々がそれを鳴らそうとしたときに，鐘は元のような音を出すことなく，自ら「三井寺！ 三井寺！」と悲嘆の言葉を発した．それ故，弁慶は鐘を再び架台から取り下ろし，それを一蹴りで三井寺に送った．近くの高い樹木の影に蔽われて，いまでもその鐘はある．――それから遠くないところにもまた古く重い鉄の釜が見られ，弁慶さんがこの釜でお米を炊いたといわれている．実際には彼はこれを一度は水瓶として使ったのだろう．巨人に関するこのような回想はもっと多く，たとえば吉野にもある．

弁慶は非常に敏腕で老獪な人物であった．元々は恐ろしい盗賊で人殺しであったが，後に，源　義経，12 世紀の後半に生きた敬愛される日本の「恐れを知らない高潔な武士」の忠実な家来になった．

我々の略図で近江の湖の西方にある比良山は，森で蔽われた長い山稜であり，南方の比叡山よりいくらか高く，そして周囲のすべての山々の中で春季に最も長く山頂に雪を戴いていることで知られている．

＜唐崎＞

大津から〔北へ〕約 1 里半，緩やかに高くなり，村落や稲田で蔽われた平地に比叡山の麓が近江の湖に向かって押し出して来るところに，唐崎の村がある．日本人は非常に古いマツが大好きで，それは大明神という寺院の側で，湖に接して水平に延び多くの支柱に支えられた枝を周囲 200 歩にまで広げている．この唐崎大明神のマツは *Pinus Massoniana*〔バビショウ〕であるが，その大きさは言葉や絵画で何倍にも誇張された．その太い幹は胸の高さですでに枝分かれしており，その木は日本人に好まれるのと同様に我々にも好まれるということよりも，その特有の形によってもっと多く我々を驚かせる．それは，趣好が遥かに異なっている点の 1 つである．

＜膳所＞

中山道と東海道は大津から清楚な街，膳所（ぜぜ）を通過する．膳所の住民は 6 千人で，街道の両側に長い家並が連なっている．琵琶湖畔には本多（ケンペルは Ondai-Sama と呼んだ）の城〔最後の藩主は本多康穣（やすしげ）〕が立っており，それは 6 万石の収入 [9] のある近江の国の第 2 番目に大きな大名であった．1868 年と 1869 年の王政復古は，興味ある時代の多くのほかの建物と同様に，この城を破壊した．

＜瀬田＞

それから 1 里で瀬田村に着く．そこでは街道は，瀬田の唐橋（からはし）と呼ばれる非常に古くから有名な木の橋（この国の言語を全く理解できなかったケンペルは Zitto-no-fasi と呼んでいる）で宇治川〔瀬田川〕を，琵琶湖から流れ出たすぐのところで越える．川の右岸にある長く延びた島が，全部で 219 m の長さの木橋の天然の脚台になっている．ツュンベリーはすでにこの様子について述べ，350 歩の長さで，欄干を具え，日本風に，つまり銅で装飾されていることを強調している〔ツュンベリー・高橋，1994〕．ケンペルはそれを，彼が日本で見た最も美しく大きな橋と呼んでいる．その下から彼方へ速く流れる琵琶湖の水はわずかな深さしかない．

源　義仲は彼の血族を平氏から救い出し，平氏の後援者であった三井寺や比叡山の僧を懲らしめ，自ら将軍になった後に，1182 年，瀬田の橋の近くで，鎌倉から急ぎ攻め上った彼の従兄弟，頼朝と義経に対する戦いで敗れた．――ここではまた，なお実に多くの注目すべき出来事が起きた．我々は伝説の時代の日本の竜，巨大なムカデ（百足）の物語に注目している．この上なく美しく乙女らしい海の女王，乙姫様は，琵琶湖の湖底に竜宮（城）を持っていた．その頃，瀬田の橋の北方 2 マイルの円錐丘ムカデ山（三上山（みかみやま））に棲み，その身体で山を 7 回り半も取り巻いた恐ろしい怪物，ムカデがいた．この獣は毎夜身体を解いて，それを琵琶湖に伸ばし，そして頭は竜宮または城にまで達して乙姫の一番よい魚を貪り食っているのに，尾の先はまだ山に触れていた．

俵　藤太（秀郷）は，乙姫をこの辛苦から救い出し，一夜瀬田の橋でムカデを待ち伏せし，そして喉に致命的な一矢を放った勇士であった．三井寺ではこの場面の絵が売られている．勇敢な射手の後ろには乙姫が立っており，彼女も彼に最大限の好意を示し，そして彼にたっぷりと酬い，なかでもすでに述べた鐘を与えた [10]．

＜草津＞

瀬田からは宇治川に沿って伏見の方へ続く道があるが，中山道はそれから 1 里以上離れた草津に向かい，草津で東海道は東へ曲がる．ケンペルはすでに，ここでとくに良質で，杖をつくるのために採取されている竹の根について述べている．ケンペルの他の記事，「そこでは苦い散薬が調製されている」から，私は 1875 年夏のことを思い出す．そのとき私は親友，ケルン生まれのケーニヒス博士と一緒

に名古屋から京都への道で草津を通過したのであった．

すなわち，我々が草津へ着く前，まだ東海道上にもいたとき，我々は 1 軒の宿屋に泊まったが，その向かいに非常に古い大きな薬屋があった．その 2 階建の家の 1 階の開かれた広間に，力強く彫刻された額のある 2 枚の古い絵が掛かっていた．その 1 枚には太い青色の漢字で持ち主の名前が載り，他の 1 枚にはより太い金色の文字で「神教丸（しんきょうがん）」，すなわち神々から教わった丸薬[11]という言葉が載っていた．

この有名なオレンジ色の丸薬は，すべての人の目に付くように大きなお盆の上に置かれていた．私はその 20 粒を 5 厘（4 ペニッヒ）で買った；それは高貴な由来を持ち，また我々の〔ドイツの〕薬屋の多くの製品に比べて非常に廉価であるというさらなる長所を持っていた．聞いたところによると，それは腹痛と毒消しによく効くという．

我々はまた艾（もぐさ）（百草）も手に入れることができた[12]．日本にいたことのある多くの読者はこの言葉の意味を訊ねるであろう．「艾は」――スペイン語の辞書にはそう書かれていた――「ニガヨモギの茎や葉の灰白色の綿毛で，中国人や日本人が病に罹った身体の部分の皮膚を焼くために用いる．」この説明が全く正しくないということは，日本で人力車に乗って苦力（くーりー）〔車夫〕の裸の背中をよく見ればだれでも分かるだろう．これらの人々の腕，肩，背中及び尻にしばしば見られる 1 マルク銀貨の半分～全部及びそれ以上の大きさのあばたは，病気の部位に焼き付けられたのではなく，かつてドイツで瀉血によって試みられたように，今日では発泡膏が使われるような場合に，大抵は後の病気を予防するという期待の下に灸が焼かれた．――ニガヨモギだけではなく，ニガヨモギ（*Artemisia*）属の他の種からも，すなわちその花の部分から艾が調製される[13]．お灸をするときはいくらかの艾を問題の場所に置き，微かに燃える線香（シキミ：*Illicium relogiosum* の樹皮から作られる）の赤熱した炭によって火が点けられる．

この薬屋の 2 階には学校があり，音読が行われていた．一人の子供が若干の言葉または短い文章を話し，あるいはむしろ歌って聞かせていた．それ以外の子供たちはそれを合唱で繰り返した．それは，子供たちをきちんとした言語形態に慣らすために続けられていた．教師はその間に隣の部屋で多くの若者たちの相手をしているように見えた．我々の到着は子供たちの仕事をいくらか掻き乱し，それによって多くの子供が開かれた押し窓に殺到し，そして歌って聞かせる小さな代理教師自身，二人の外国人（異人さん）をよく見ようとして何回も姿を見せた．

＜守山＞

草津を出て 1 里半，中山道の平坦な区間で立派な寺院〔東門院〕のある守山宿に到着した．この東方にはすでに述べた三上山[*13]，すなわちこの地方全域で最も高く，独立した円錐形の山が見える．草津から美濃境まで，街道は多くの涸れた小河川―流れのあるのは雨期に限られる―の河床を渡った．我々が到着した最初の川〔野洲川（やすがわ）〕は，両側の稲田よりも数 m 高い．クニッピング氏は，この現象〔天井川（てんじょうがわ）〕が，この国の他のいくつかの河床でも認められるように，著しい砂の堆積―それによって両側の堤を次々に高くすることも必要となる―の結果であると正しく説明した．

守山宿と愛知川（えちがわ）〔原文では Ichigawa〕宿との間で，中山道は砂・チャート礫からなる多くの低い丘陵を越える．そのそばには高さ 100 m ～ 400 m の山がある．南方及び南東方には，顕著な丘陵と多くの不毛地帯が見られる．この特徴は尾張境の美濃南部の山地―丘陵地帯でも顕著なので，詳しい説明は次の旅行区間〔2. 3 章〕で最初に述べたいと思う．

＜愛知川＞

愛知川宿に到着する前，最後の砂質の丘陵を越える際に，街道の左側に，湖の南東に向かう湾に面して，琵琶湖最大の島，沖島（おきのしま）〔原文では Okinashima〕が見えて来る．地図が示すほどには高くはないこの島は，西側の湖上から見る方が，より美しい姿を見せる．そのとき，島の鞍部に美しく横たわる村及び灰黒色の岩石[*14]の間の快い緑の叢に気が付くだろう．これに対して，北東に隣接する陸地は草木のない不毛の地であるように見える．

愛知川は琵琶湖の中山道側の最も重要な流入河川であるが，通常 100 m 幅の河床の半分も水を満たしていない．愛知川は，その右岸にある同名の村と同様に，単調な平野の中にあり，それを過ぎると高宮（たかみや）宿に着く．琵琶湖ははるか西方にあって，ここからは見えない．周りの田畑はよく耕され，米や通常の農産物のほかに，綿，麻，そしてより丘陵状の土地では茶の木が植えられている．ある地区では果樹も見られる．街道のこの区間の重要な宿駅は高宮と呼ばれ，非常に目の細かい綿布の産地として知られている．

＜番場＞

街道は近江と美濃の国境山脈を越えようとしており，琵琶湖を再び眺められる低い山稜のすぐ近くで鳥居本（とりいもと）宿に下り，それから摺針（すりはり）峠を越えて番場へと通じている．この峠の上の，壮大な眺めで有名な茶店は海抜 175 m の高さに

あり，湖面からの高さはその約半分である．ここで我々は琵琶湖に別れを告げる．ここでは琵琶湖をその最も幅広いところで俯瞰し，その西方に比良山，比叡山，男山を含む鬱蒼たる山脈を，北方には同様に鬱蒼とした竹生島〔原文では Tsukubushima〕と北東湖岸の多くの村落を，そして振り返れば美濃と近江の高い国境山地を見ることができる．しかし近くには，ほぼ南西方の湖岸近くに，立派で歴史的にも注目される人口２万～２万５千人の彦根の街がある．その白い城は琵琶湖の周りの見晴しのよい多くの場所から眺められる．ここには，近江の最も有力な大名で譜代筆頭であった井伊が居住していた．譜代とは「功績を挙げた一門」，すなわち，最初の徳川将軍に仕えて抜きん出た働きをし，その後関ヶ原の合戦（2. 3 節を見よ）で主君家康に勝利と確実な政権を得さしめた大将でかつ高位の文官であり，ノルマンの騎士フォン・ウィルヘルムがヘイスティングスの会戦〔1066 年〕の後征服者たちにしたように，彼らは家康によって大名・小名に封じられた．

将軍が未成年である間，彦根の大名が摂政の高職についていた．井伊掃部頭〔直弼〕は井伊家の最後の人で，国が騒然としていたときに，そのような人として江戸で役目を果たした．そのときに彼は大変な憎まれ者になり，1859 年に〔桜田門外の変で〕暗殺者の手に落ちた．

琵琶湖の東側の大抵の村落では養蚕と絹織物が最も重要な生計の源であり，一方，茶の栽培はここではわずかな地歩を占めたに過ぎなかった．

＜伊吹山＞

中山道は番場から琵琶湖を離れ，我々を美しい景観の地を経て東方へ，そしてわずかな高まりを越えてさらに醒井，柏原へと導く．この区間全体にわたって，立派な山々が道の両側の近くあるいは遠くに見られるようになる．山々のうち，最も雄大で有名なものが伊吹山〔標高 1,377 m〕である．多くのヨーロッパ人は，比叡山，大津及びその他の地点から，この重要な山，「頭を裁たれた円錐形の砂糖のかたまり」が，琵琶湖北東部の背景の中に堂々と聳え立つのを見て来たが，誰もそれに登ったことはなく，けれどもそれは自然探究者にとってなによりも苦労に値する対象なのである．

私が 1874 年の春，この国における最初の大旅行の準備をしていたとき，私は古くからの尊敬する友であり，シーボルトの著名な弟子である伊藤圭介[*15]に，尾張及び美濃において最も訪れる価値のある地点について質問した．彼は「植物学者に対しては，私は第一に伊吹山の名を挙げる」と言い，それによってこの山は私の当時の計画に入ったのである．雨のためにこの計画の実行は挫折した．琵琶湖の北東岸の長浜―ここへ私は絹織物工業視察のために京都から赴いたことがあった―から，私は６月後半の大雨の中，伊吹山北西〔南西？〕麓の春照村へ旅行した．ここでドイツ国から来た異人さん〔私〕は一日を無駄にして天気がよくなるのを待ち，それから，山に登ることができずに，藤川を越えて，中山道の関ヶ原に回らねばならなかった．旅館の主人の報告によれば，この山は 130 種類の薬剤を産出する．彼はそのうちの２つが石灰鍾乳石と珪灰石であることを我々に示してくれた．私が特に興味を持ったのは，暖かい雨のためにいたるところでおびき出された陸棲の巻貝の産出であった．ヤマキサゴ（*Helicina*）の中では長さ 1 mm の繊毛を持つ *H. Mackensii* が異常に多い．ヤマキサゴの 1 種（*Helicina* sp.）及び多くの美しい種類のキセルガイ（*Clausilia*）の 1 種もここで採集されたが，しかし私は，当時ほとんど知られていなかった巨大なオオギセル（*Cl. Yokohamaensis*）―私が翌年四国で多数発見した―を探したが，無駄であった．

翌年，私の従者が京都で若干の暇な日があり，かつ十分に訓練されていたので，私は彼を伊吹山の山頂に行かせてそこに産出する植物を採集させた．これはもちろん，山の植物群を知るのに特に適切な手段ではなかったが，しかし私はそれによって伊吹山が，高度もまた近似している箱根山の最高地点と同様な，類似の植生を持っているという確信に達した．その最も注目すべき要素は，イチリンソウ（*Anemone altaica* Fisch.），メギ（*Berberis chinensis* Desf.），クリンソウ（*Primula japonica* A. Grey）その他に属し，これらははるかに南方〔南日本〕でもまだ認められていない．

古い伝説に富む歴史の日本の勇士，日本武尊命（原文では Yamato-Dake）は，すでに伊吹山及びその山神または山霊を知っていた．山はいつも悪魔の棲家と見られていた．

おそらく昔の不安な時代には，山とその近隣は大胆で恐ろしい強盗にふさわしい隠れ家をたびたび提供し，その隠れ家から出て，彼らはたやすく街道上の旅行者に，または京都の住民にすら，追いついて略奪することができた．春照の宿屋にあった鍾乳石の破片から，あるいはまた伊吹山に由来し近江の湖に流入する河川―翌日我々が中山道への道で渡った―の礫に見られる多くの石灰岩から推察したように，小さな洞穴が山中にあることはありそうなことである．

北方には，そして伊吹山からの谷〔姉川〕の窪みによって隔てられて，より低い七尾山〔標高 691 m〕が姿を現わし，それは〔近江と〕越前との国境山脈に連結する支脈をなしている．

＜柏原＞

伊吹山の麓から中山道への最も近い道は，美しい丘陵地帯を経て関ヶ原へ通じているが，他のもっとよい道はいくつかの村を通って大きな宿駅，柏原[14]へ通じている．柏原の立派で大きな本陣[15]では外国人は関ヶ原よりもよくもてなされる．ここでは，とくに近隣の高みに登るならば，この地方とその美しい鬱蒼たる山々をよりよく眺めることができ，南方にはとくにドーム状の霊仙山（りょうぜんざん）〔原文ではRiozen；標高 1,064 m〕が見え，それを旅行者はすでに愛知川の手前で，美濃との国境山地のいくつかの山頂と共に認めていたのである．

原注

1) 1868年の内戦〔戊申戦争〕の時に灰燼に帰した東京の北部，上野の有名な寺〔寛永寺〕は東叡山（東の比叡山）と呼ばれ，徳川将軍の城〔江戸城〕の北東の守りであった．
2) 織田〔原文ではOta〕は家名，信長は個人名．一般に後者が後ろに付く．
3) 仏教が食することを禁じている5つのネギ属は，ポロネギ，ワケギ，アサツキ，ニンニク，タマネギである．
4) 1875年の晩夏に，私はとにかくこの道が著しく改良されていることに気が付いた．人々は前もって道路の穴や深い轍（わだち）を手早く埋め，一部分はなんとか石で舗装までしたので，人力車でもその上を進むことができた．ヒューブナー男爵が見聞した当時は，彼の主張にもかかわらず，それは，「よく保守されて」いなかったことは確かであった〔Hübner，1873〕．
5) 我々はこの地名がE．ケンペルのFinoo-Katoggeに相当することを知っている．ケンペルの著作では，日本に関する多くの古い文書を扱ったときと同様に，固有名詞がしばしば見分けが付かないほど改変されている．
6) O＝大きい．Tsu＝港．
7) クニッピング氏が大津の高度を144 mと表示したのは，追分や草津の高度についてと同様に，明らかな間違いである〔滋賀県庁の標高：約95 m〕．
8) 琵琶湖に潜んでいる魚のうち，最も重要で最もありふれたものとして，以下の名が挙げられる：コイ（*Cyprinus haematopterus*），フナ（*Carassus Langsdorffii*），ナマズ（*Silurus japonicus*），アユ（あいと発音，*Plectoglossusu altivellis*），ウナギ（*Anguilla japonica*）．これらのほか，カラスガイ（*Anodonta*），ウニオ（*Unio*），シジミ（*Corbicula*），カワニナ（*Melania*）及びタニシ（*Palidina*）の種々の〔二枚貝の〕種が注目される．最近，レオン・メチコフ〔ロシアの地理学者：1838–1888〕は彼の『日本帝国』〔Metschikoff，1878〕の中で琵琶湖にサンショウウオが産出するという古い時代の誤りを繰り返し述べている．
9) 1石＝180. 4 リットル．昔は大名や役人の収入はすべて米の石で決められていた．1石の価値は2.5ドルと5ドルの間で変化する．
10) ケンペルは別の物語を語っている：「ここでは1匹の蛇(？)または竜が湖岸を棲家にしていた．これに対して，人の背丈の倍ほどの長さで力の強いムカデ（蜈蚣）が，ここから2里離れた街道沿いの山または小高い円い丘―正にこの動物によってムカデ山という名を付けられた―に棲み，街道に出ては人を騒がせていたが，ある夜，湖岸に行って竜が生み残した卵を食い尽くした．このことで2匹の動物間に激しい争いが起こり，竜が勝ち残って，その危険な敵は死んでしまった．この出来事を記念して，人々は村の一地区のこの場所を俵　藤太と名付け，このことがあった証拠を示すために神社を建立した.」〔ケンペル・斎藤，1977〕
11) Shin＝神道の神，最高存在者．kiyosuru＝教える．Gan，Ganyaku＝丸薬．
12) Mo＝火，moyeru＝燃える，Kusa=草本，草．
13) 艾が調製されるモグサ属（*Artemisia* sp.），特に*Artemisia.vulgaris* L.は，特に伊吹山に多産し，古くから有名である．
14) Kashiwabara，柏の原は，大きな葉の柏（*Quercus dentate* Thbg.）と原，すなわち未耕作の草地，森の草地から名付けられた．
15) 身分の高い旅行者が宿泊する宿屋．

訳注

*1 比叡花崗岩とよばれ，おもに粗粒黒雲母花崗岩からなり，97～95 Maと約72 Maの年代を示す（木村ほか，1998）．琵琶湖を取り巻いて分布する花崗岩体の中では，年代がやや古いこと，化学組成のMgO/FeO比が高いことなど，他と異なる特徴を持っている（周琵琶湖花崗岩団体研究グループ，2008）．良質な石材（白川石）として古くから採掘された．
*2 丹波帯のジュラ紀コンプレックスの一部（木村ほか，1998）．ラインは「花崗岩が山稜全体の基盤を作り，粘板岩が花崗岩の上に重なっている」と記しているが，花崗岩は粘板岩を貫いているので，この説明は現在では正しくない．
*3 「比叡山山頂は玄武岩質である」というのは間違いで，山頂部は粘板岩（黒色頁岩）が花崗岩による接触変成作用を受けてできたホルンフェルスである（中村，1931，p.190；木村ほか，1998）．
*4 Fernan Mendes Pinto（1509?–1583）．ポルトガルの冒険家，著述家．ザビエルの後継者として日本にも渡来したが，後にイエズス会を脱会した．『東洋遍歴記』（ピント・岡村，1979/80）などの著作がある．
*5 「ラインの記事にはケンペルの日本誌を参考にして書いたところが少なくない」（中村，1931，p.191の注）．中村が「ライン―中山道誌」（前半のみ）を翻訳した時点では，すでに呉（1928/29）によってケンペルの『日本誌』の邦訳が出版されていたので，これを参考にすることができたのであろう．
*6 いまは大津峠という地名はない．現在の国道1号線の旧逢坂山関所のあたり（標高約165 m）であろう．
*7 山科区日ノ岡付近に小規模に分布する大阪層群深草層上部（脇田ほか，2013）の粘土層に相当する（水野清秀氏のご教示による）．
*8 追分の右手（東方）にあるのは音羽山（標高 593 m）で，これを男山と呼んだのはラインの間違いである（中村，1931，p.194）．
*9 京都・大津間の鉄道は，1878年に逢坂山トンネル（当時の日本最長の 664.8 m）の掘削工事が始まり，1881年に開通した．その後，大津・長浜間，長浜・敦賀間も相次いで開通した（老川，2014）．
*10 オーストリアの外交官（1811–1892）．1871年の世界旅行の折に日本各地を約2か月間旅行し，その日記風の見聞記を『世界周遊記第2部日本編』（Hübner，1873）として刊行した．
*11 平安時代中期の武将，藤原秀郷（ふじわらのひでさと）（生没年未詳）の別名．平（たいらの）　将門（まさかど）の乱を制圧したことで有名（阿部，2005）．三上山のムカデ退治伝説の主人公とされた．
*12 旧約聖書の「サムエル記」に登場する身長 3 mの巨人．青年ダビデ（後のダビデ王）に打ち負かされる．
*13 「近江富士」とよばれ，湖東地方の島状山地の1つ．標高 432 m．富士山に似た美しい山容を示すが，火山ではなく，丹波帯のチャートが浸食されてできた地形である（吉田ほか，2003）．
*14 沖島は白亜紀の沖島溶結凝灰岩（湖東流紋岩類の一部）及び花崗閃緑斑岩からなる（石田ほか，1984）．花崗岩による熱変成作用を受けたために黒ずんだ色を示す．
*15 幕末―明治期の本草学・植物学者（1803–1901）．名古屋出身．シーボルトから贈られた“Flora Iaponica”（Thunberg，1784）を翻訳，注記して『泰西本草名疏』（伊藤，1829）を刊行した．これはリンネの植物分類法を日本産の植物に適用した最初の書物であった．1881年より東京大学教授．日本の理学博士第1号（西村，1989による）．

謝辞：粟田焼の原料である日ノ岡土の地質についてご教示いただいた産業技術総合研究所地質調査総合センターの水野清秀氏に厚くお礼申し上げる．

文　献

阿部　猛編（2005）　日本古代史事典．朝倉書店，東京，731p.

Hübner, M. Le Baron de（1873）　*Promenade autour de monde, 1871, vol. 2, Japon*. Libraire Hachette & Co., Paris, 184p.

石田志郎・河田清雄・宮村　学（1984）　彦根西部地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），地質調査所，121p.

伊藤圭介（1829）『泰西本草名疏』．上・下 2 冊．花繞書屋．

ケンペル，E.（著）・斎藤　信（訳）（1977）　江戸参府旅行日記．平凡社東洋文庫，東京，**303**，371p.

木村克己・吉岡敏和・井本伸広・田中里志・武蔵野　実・高橋裕平（1998）　京都東北部地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），地質調査所，88p.

呉　秀三譯註（1928/29）　ケンプェル江戸参府紀行（上巻・下巻）．駿南社，東京，595p.，634p.

Metchikoff, L.（1878）　*L'empire japonais. Pays, Temple, Histoire*. Imprimerie oriental de L'Atsume Gusa, Genève, 692p.

西村三郎（1989）　リンネとその使徒たち．探検博物学の夜明け．人文書院，京都，348p.

中村新太郎（1931）　新訳日本地学論文集（15）～（17），ライン―中山道誌．地球，**16**，133–139，188–199，279–292.

老川慶喜（2014）　日本鉄道史　幕末・明治篇．中公新書，東京，227p.

ピント , F. M.（著）・岡村多希子（訳）（1979/80）『東洋遍歴記』（3 巻）．平凡社東洋文庫, 東京, **366**（320p.），**371**（360p.），**373**（323p.）.

Rein, J. J.（1880）　Der Nakasendô in Japan, nach eigenen Beobachtungen und Studien im Anschluss an die Itinerar-Aufnahme von E. Knipping und mit Benutzung von dessen Notizen. *Petermann's Mittheilungen., Ergäntzungsheft*, No. 59, S. 38.

周琵琶湖花崗岩団体研究グループ（2008）　比叡花崗岩体の形成史と白亜紀火成活動史における位置づけ．地質学雑誌，**114**，53–69.

Thunberg, C. P.（1784）　*Flora Iaponica*. Lipsiae, Leipzig, 418p.

ツュンベリー，C. P.（著）・高橋　文（訳）（1994）　江戸参府随行記．平凡社東洋文庫，東京，**583**，406p.

脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原　琢・中野聡志・竹内恵二・田口雄作（2013）　京都東南部の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），産業技術総合研究所地質調査総合センター，124p.

山田直利・矢島道子（2017）　J. J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その 1）．GSJ 地質ニュース，**6**，195–201.

吉田史郎・西岡芳晴・木村克己・長森英明（2003）　近江八幡地域の地質．地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅），産業技術総合研究所地質調査総合センター，72p.

山田直利（やまだ　なおとし）

1953 年東京大学理学部地質学科卒，工業技術院地質調査所入所．78 年地質部地質第 1 課長．88 年地質標本館長．2000 年日本地質学会名誉会員．専攻は岩石学・火山学・地学史（理学博士）．2010 年以降，矢島道子と共にナウマン論文を翻訳．E-mail: naotosi-y@h7.dion.ne.jp

矢島道子（やじま　みちこ）

1975 年東京大学理学部地質学科卒．81 年東京大学大学院理学研究科博士課程修了（理学博士）．2016 年より日本大学文理学部．専攻は地学史（主に日本，古生物学）．E-mail: pxi02070@nifty.com

訂正

J. J. ライン著「中山道旅行記」邦訳（その 1）（本誌 6 巻 6 号）

2 章 1 節，訳注 *2（201 ページ右段）

誤：「廻国希観」

正：「廻国奇観」（八耳俊文氏のご指摘による）．

YAMADA Naotoshi and YAJIMA Michiko（2017）Japanese translation of "Der Nakasendô in Japan"（Rein, 1880）, Part 2 From Kyoto to the border on Mino.

（受付：2017 年 5 月 12 日）